

「吉里吉里の山が壊れた」

「俺方おらほのあたりが源氏ボタルの北限なんだっちゃ」という亡き友Kさんの声が耳元に蘇よみがえってきました。そして、それは彼の故郷を突然襲った大地震のあまりにも大きな爪あとに、途方にくれたような悲しい響きでした。

去る6月14日の朝、発生した岩手・宮城内陸地震は、岩手県と宮城県の県境である栗駒山周辺の地域の自然と人々の生活をずたずたに切り裂きました。そして、彼の地は、私自身の思い入れも深いところでした。

私は、旧自治省に入省して、3か月の研修を終えて、宮城県庁に赴任しました。その時に地方課で机を並べていたのが、金成町かななり（現栗原市）から出向で宮城県庁に派遣されていたKさんでした。私より一回り以上年上ではありましたが、出向者同士で同じ独身寮住まいということもあり、9か月ほど、公私ともども、ほとんど一緒に過ごしました。彼は、地元で北限の源氏ボタルを保存する活動をしていて、寮の部屋でも水槽に蛍の幼虫えさの餌となるカワニナを飼っていました。よく水槽の横で一升瓶を脇に酒を飲み交わしたものです。また、溪流釣りも趣味で、毛ばりを手作りしながら、二人で「釣らぬイワナの骨算用？」をしていました。

また、私の愛読書の一つでもある、井上ひさしの「吉里吉里人きりきりじん」も、東北本線の一ノ関駅手前での列車乗っ取りから物語が始まり、まさにこの地方が舞台となっています。奇想天外で、どたばた喜劇的な話ですが、純朴な人々が多いこの地域を、吉里吉里国として日本から独立させて、一つのユートピアを求めようとしたものでした。

さらに、ここは、奥州藤原氏が栄華を極めた、深い歴史を持つところです。衣川ころもがわの古戦場では、芭蕉が「夏草や兵どもが夢のあと」の名句を詠みました。大学時代に衣川村（現奥州市）を訪れた時、村長さんが、義経は、ここで死なずに中国へ渡りチンギス・ハーンとなった、という伝説を真顔で教えてくれました。

自然がとてつもなく大きな猛威をふるった後でも、源氏ボタルは舞い、夏草が生い茂っていることでしょう。無常感を禁じ得ませんが、同時にいつどこでどんな大災害が起こるかもしれないという覚悟と備えの必要性を改めて痛感させられています。

犠牲となられた方々のご冥福と、一日も早い復旧、復興を心からお祈り申し上げます。